

education: from a survey of awareness among Australian students]. *Nihongo kyōiku ronshū: Sekai no Nihongo kyōiku [Japanese-Language Education Overseas]*, 12, 1-20.

Nakajima, Etsuko (1997). Gimon-hyōgen no gyōsō : [Aspects in interrogative phrases] . In Gendai Nihongo Kenkyūkai [Modern Japanese Research Society] (Ed.), *Josei no kotoba: shokubahen [Women's language: the workplace]* (pp. 59-82). Tokyo: Hitsuji Shobō.

Mizumoto, Terumi (2006). Terebi dorama to jishshakai ni okeru jousei-bunmatsushi shiyō no zure ni miru gender filter [Teaching feminine sentence-final particles between real society and TV dramas]. *Nihongo Gender Gakkai [The Society for Gender Studies in Japanese]* (Ed.), *Nihongo to Gender [Japanese and Gender]* (pp. 73-94). Tokyo: Hitsuji Shobō.

Mizumoto, T., Fukumori, S., Takada, K. (2007b). Kaiwa kyōzai ni okeru jousei-bunmatsushi no Atsukai: [Teaching Female Sentence-final Particles in Conversations]. *Proceedings of the Sixth International Symposium on Oral Proficiency Interview*, 85-90.

Mizumoto, T., Fukumori, S., Takada, K. (2009). Nihongo kyōzai ni miru jousei-bunmatsushi: Jishshakai ni okeru shiyōjittai chōsa to no hikaku bunseki [Comparative Analysis of Female Sentence-final Particles in Japanese Textbooks with Usage in Real Society]. *Journal of the Society for Gender Studies in Japanese*, 4, 12-24.

Mizumoto, Terumi (2011). Nihongo kyōshi no ishiki chōsa bunseki: Nihongo kyōkasho ni okeru jousei-bunmatsushi shiyō ni kanshite [An analysis of Japanese language teacher's consciousness of female sentence-final particle usage in Japanese textbooks]. *Bulletin of the Center for Fundamental Education*, 9, 55-80.

Mizumoto, Terumi (2013a). Nihongo kyōkasho ni okeru jousei no shokugyō: Kyōkasho bunseki to Nihongo kyōshi no ishiki chōsa [Women's occupations in Japanese language textbooks: A Comparative analysis of textbooks and teachers' gender consciousness]. *Bulletin of the Center for Fundamental Education*, 16, 19-44.

Mizumoto, Terumi (2013b). Nihongo kyōkasho ni okeru gender: Kyōkasho no Nihon jousei-zō wa gendai shakai no jittai wo tsutaete iru ka [Gender in Japanese language textbooks: Do the images of Japanese women appropriately represent the realities of modern society?]. *Language and Conceptual World View*, No.45. National Taras Shevchenko University of Kiev, 153-159.

Kawasaki, K. & McDougall, K. (2003). Implications representations of casual conversation: A Case study in gender-associated sentence final particles. *Nihongo kyōiku ronshū: Sekai no Nihongo Kyōiku [Japanese-Language Education Overseas]*, 13, 41-55.

Note: As for the list of the investigated textbooks, please refer to the chart that is indicated on the last page of the Japanese paper.

(日本語訳)

日本語教科書におけるジェンダー：現代社会の実情と教える側の認識

水本光美

キーワード：日本語教科書、女性文末詞、日本語教師、ジェンダー・イデオロギー

1. はじめに

日本語学習者にとって、教科書は言語を習得するためだけではなく、日本社会や日本文化を知る上でも重要な役割を果たす。特に、日本社会での実体験がない海外における学習者にとっては、教科書に描かれる日本人像や日本社会像がそのまま現在の日本の姿であると受け取られる可能性が高い。現在、日本語教育において広範に使用されている教科書の多くには、従来のジェンダー・イデオロギー的な観念に影響を受けた描写が認められる。例えば、現在は実社会で普通体によるくだけた会話において、従来の“女性文末詞”が既に消滅しているにも拘わらず、多くの日本語教科書の中の若い女性登場人物に今もなお使用され続けているという「不自然な言語使用」が長年改善されずに引き継がれている。

このような教科書を現場で扱う日本語教育者が教科書の中のジェンダーをどのように認識し教えているのか、それを把握するために、日本語教育に携わる人々計 200 名へアンケート調査を実施した。その調査により、日本国内及び韓国在住者の回答結果と欧州在住者の回答結果に顕著な差異が認められたのが「女性文末詞の使用状況」である。本研究では、水本他 (2009) による「女性文末詞」に関する教科書研究結果を日本語教師がどのように捉え、かつ、教育現場で女性文末詞をどのように教えているのかを探る。さらに、教科書がなぜ、ことばの変化に関して反応が穏やかであるのかについて考察し、今後の教科書への提案を試みるものである。

2. 先行研究：日本語教科書と自然会話の比較分析

日本語教科書における女性文末詞の研究は90年代には主だった研究がなされた。「～わ」「～かしら」などの女性文末詞は、先行研究 (小林1993、尾崎1997、中島1997、小川2004など) によって衰退傾向にあると報告されている。それらの自然会話のデータは収集時期が90年代前半から半ば頃であり、10年を経過すると世代も変わるため、水本 (2006) では2004年から2006年にかけて新たに独自のデータ収集を実施した。(調査方法は先行研究を参照)

先行研究 (水本2006) における女性文末詞は、現在は20代から30代の若い世代の女性の普通体によるくだけた会話からは殆ど消滅したと認められた主に4種の文末詞、即ち、「～わ (よ/ね)」「～かしら」「体言^{注1}+ね/よ」「～のよ」に調査対象を絞った。その上で、水本他 (2009) においては、20代から40代の計36名の女性標準語話者のデータを集計した結果、その3世代の女性文末詞利用率平均値は、わずか5.26%であり、取り分け20代は2.36%と微量であることが確認出来た。まったく使用しないのも7名見られた。僅かに使用される場合も、「普段は使用しないが、冗談や年配女性の発話の引用や皮肉などで意図的に使用される」ということが、会話収集した女性達に対して実施したアンケート調査で明らかになった。

一方、大半の教科書の中に扱われる女性文末詞研究は少なく、筆者以前の研究としては、KAWASAKI & MCDUGALL(2003)のものが明確な独自データによる唯一の研究である。その他、鈴木 (2007) やトムソン・飯田 (2002) からも女性文末詞の衰退傾向が日本語教育に反映されていない点を指摘したが、それらの分析対象数もデータ数も充分ではない。

そこで、水本他 (2009) では、1994年から2006年の間に出版された初中級日本語教科書12種、聴解教材8種、日本語能力試験および日本留学試験19種、合計39種を調査したところ、その平均利用率は54.42%から79.42%と、自然会話の約10倍から15倍と高いということが確認出来た。また、そのような教科書の会話を聴き発話練習をした若い学習者は、教師が女性文末詞についてとりわけ説明をしなければ、70%が女性文末詞を教科書の会話例の通り使用しようとする実験結果も、それ以前の研究、水本他(2007b)で明らかになっている。

3. 日本語教育者への意識調査と結果分析

2010年6月から7月にかけて、日本国内、韓国、欧州に在住する日本語教育関係者総数200名(日本国内+韓国:118名、欧州:82名)に対してアンケート調査を実施し、その結果を分析した。調査方法に関しては水本 (2011,2013a)を参照されたい。この調査では、まず、教育者が日本社会の現状を把握しているかどうかを確認し、教科書におけるジェンダーに関する問題点に対して、教育者がどのような認識を持ちどう考えるかを知ることが目的とした。この調査では、a.日本国内と韓国、b.欧州に分けて統計をとり分析した^{注2}が、日本女性像や女性の職業、主婦像、および家族像など^{注3}、大方の項目において、この二つのグループに、さほど大きな差異は認められなかった。しかし、その中で特徴的な差異が認められたものが、女性文末詞に対する認識と考えであった。本研究においては、その差異が顕著であった女性文末詞に関する調査結果の比較分析をし、潜在するジェンダー・バイアスを考察す

る。

前項で述べた現在の若い女性による自然会話において、「女性文末詞非使用」という実態を認識しているかどうか」という日本語教師に対するアンケート調査結果では、aは、「知っている」が91%であったのに対し、bでは76%であり、「知らなかった」と回答した人のうちの85%が50代以上の女性であった。彼らの75%が以前10年以上標準語圏である首都圏に在住したことがあることや彼らの年齢から推測すると、この分類に属する女性教師たちは、海外に移って以来は、日本国内の若い世代の女性達のことばの変化に気づかない環境にいたと見受けられる。

次に、教師たちに「男女の文末形式を対比的に教科書で紹介すること」の是非、を聞いてみたところ、84%が必要であると答えた。その理由としては、「日本語の特徴である」「ポライトネスやビジネスでは必要」「日本語の男女のことばの違いは残したい」などと考える人は全体の約3分の1であり、残りの3分の2は「小説・マンガ・ドラマ・映画などで使用されている」「今も使用している年代もある」「知識として教え、聞いて理解出来ることが肝要」などの意見が大半を占めた。これにより、大半が現状（年配者は今なお使用している）を把握しており、女性文末詞が使用される創作物の理解には必要であると考えていることが分かる。ただ、3分の1の中の「ポライトネスやビジネスでは必要」に関しては、果たしてその場合、普通体を使用するくだけた話し方をするだろうか、という疑問が残る。また、「日本語の男女のことばの違いは残したい」と考える場合、そこに、言語による男女の役割分担的なジェンダー・バイアス的な考え方による影響が潜在している可能性はないであろうか。

さらに、「若い世代の女性登場人物の発話に女性文末詞が使用されていること」に関し、教師達がどのように考えるかという回答結果にも、次の表1のように、aとbの差が顕著に見られた。

表1 若い世代の女性登場人物の発話に女性文末詞が使用されていること

居住地	良いと思う	年代と場面により使うべきではない	若い世代は使うべきではない
a.日本国内・韓国	29%	63%	8%
b.欧州	61%	37%	2%

b.の約3分の2が「良いと思う」と答えたのに対し、a.では3分の1にも満たない。対照的に、「年代と場面により使うべきではない」と答えたのは、a.が約3分の2でb.が約3分の1余りである。この結果から、a.の国内と韓国在住の教師たちは、「若い世代の女性は現実には使用しない」ことを明確に認識し、若い世代の女性が使用すると、「現実とかけ離れて不自然」「同世代日本人の話し方を学習することを本人達が望んでいる」「実情に合わせた自然な使い方をすべき」「女性だからとステレオタイプの使い方は問題」「過度な使用により誤った認識、ジェンダーに反映する恐れあり」など、若い世代の現状に反した使い方を教科書で指導することはジェンダー問題である、との認識が高いことが推察出来る。

一方、b.の欧州在住の教師たちは、76%が若い世代の非使用を認識しているにも拘わらず、3分の2が「良いと思う」と回答する矛盾が生じている。「良い」と考える理由としては、「女性が男性と同じ話し方だと変に感じる」「女性文末詞を使用しない女性学習者が悪い印象を持たれる」「美しく柔らかい女性らしいことばを日本文化として残したい」「その方が正統な日本語という感じがする」などが挙げられた。これらの考え方には、明らかに、ジェンダー・イデオロギーに影響されたバイアス的な観念が潜在していることが見てとれる。

4. 考察とまとめ

以上の調査結果より次のことが確認できた。

- (1) 現在の若い世代の女性が女性文末詞を使用しなくなっているという現状は、在住国に拘わらず、

大方が認識している。

- (2) 欧州在住者の多くが若い世代の女性の女性文末詞使用を「よし」としており、そこには少なからず、ジェンダー・イデオロギーの影響が認められる。
- (3) 日本と韓国在住者の大半は、女性文末詞は知識として教え、聞いて理解出来るように教育する必要があると考えている。
- (4) いずれにせよ、若い世代が積極的に使用すべきではない、と考える教師は、より現状に即した自然な言語使用を求めている。

調査対象とした教科書の中には、2000年代半ば頃に改訂版が発行されている。しかし、その改訂版で扱うトピックなどが現代風に更新されてはいても、若い世代の女性文末詞の使用率は64%から74%と未だに高い。言語の教科書でありながら、言語における変化が注視されず現状に即して更新されないのはなぜであろうか。教科書制作者は、まだ根強く「女性文末詞＝日本語の特徴＝継承すべき日本文化」という意識を持ち続けているのであろうか。或いは、「若い世代より中年以降の世代のほうが主体」という認識によるのであろうか。仮に社会的にはそうであったとしても、現実的にすでに消滅してしまっている表現を言語の教科書のなかで若い世代の学習者に敢えて学ばせる意義があるのだろうか。

アンケートの中で「教科書は典型を提示する必要がある」ために若い女性による女性文末詞の使用を容認するという意見もあった。確かに典型は学習者にとって分かりやすく理解の助けになる。しかし、その中にジェンダー・イデオロギーが含まれてはいないだろうか。私たち教師は、従来の典型を伝え続け、また、現状ははまだ女性文末詞を使用する年代が主流であるとの認識にたって、すでに変化し今後も変化を続ける若い世代のことばを無視していいのだろうか。

教科書で女性文末詞を提示するとしたら、上記(3)のように、聞いたり読んだりしてそれが認識でき意味が分かるようになれば、充分である。わざわざ、若い登場人物に使わせる例を提示することは無意味であるし、若い学習者に敢えて使用させるような練習もかえって学習者の混乱を招くだけである。教科書の中の女性文末詞は、現実にもそれを頻繁に使用している年代に限定するのが適切であり、小説や映画などの仮想世界では、一種の役割語として使用されていることを認識させるべきであろう。

教師へのアンケートの最後に「ジェンダー（問題）に配慮した日本語教科書は必要か」という質問に対して、「必要ではない」と回答したのは、僅か1名であり、約65%が「必要だ」と回答したことから、少なくとも、若い世代の女性登場人物が女性文末詞を使用しない教科書が出現しても良い時期だと考えられる。今後は、女性文末詞を使用せず、どのような表現を若者たちが実際に用いているのか調査し、ジェンダー問題に配慮した教科書の具体案の提示を研究課題としたい。

注

1. 「体言」とは、自立語で活用を有せず文の主語となり得るもの。名詞、代名詞、数詞。[\(本文に戻る\)](#)
2. 女性文末詞に関する a. の日本国内と韓国の調査結果は水本 (2011) を参照されたい。[\(本文に戻る\)](#)
3. 「日本国内と韓国」と「欧州」を合わせた調査結果のうち、女性の職業に関しては水本 (2013a) をまた、日本の家族像に関しては水本 (2013b) を参照されたい。[\(本文に戻る\)](#)

[参考文献]

- 小川早百合 (2004) 「話し言葉の男女差—定義・意識・実際—」『日本語とジェンダー』vol.4, 日本語ジェンダー学会, pp.26-39.
- 尾崎喜光 (1997) 「女性専用の文末形式のいま」『女性の言葉・職場編』, 現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp.33-58.

- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語-若い世代の言葉の『中性化』について」『日本語学』12-6, pp.181-192.
- 鈴木睦 (2007) 「言葉の男女差と日本語教育」『日本語教育』134号, 日本語教育学会, pp.48-57.
- トムソン木下千尋・飯田純子 (2002) 「日本語教育における性差の学習: オーストラリアの学習者の意識調査より」『日本語教育論集 世界の日本語教育』12, 国際交流基金日本語国際センター, pp.1-20.
- 中島悦子 (1997) 「疑問表現の様相」現代日本語研究会編『女性の言葉・職場編』, ひつじ書房, pp.59-82.
- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末使用のずれにみるジェンダーフィルター」『日本語とジェンダー』, ひつじ書房, pp.73-94.
- 水本光美・福盛寿賀子・高田恭子 (2007b) 「会話指導における女性文末詞の扱い」『第6回 OPI 国際シンポジウム論文集』, 第6回 OPI 国際シンポジウム, pp.85-90.
- 水本光美・福盛寿賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞 一実社会における使用実態調査との比較分析一」『日本語とジェンダー』第9号, 日本語ジェンダー学会, pp.12-24.
- 水本光美 (2011) 「日本語教師の意識調査分析-日本語教科書における女性文末詞使用に関して-」『基盤教育センター紀要』第9号, 北九州市立大学, pp.55-80.
- 水本光美 (2013a) 「日本語教科書における女性の職業: 教科書分析と日本語教師の意識調査分析」『基盤教育センター紀要』第16号, 北九州市立大学, pp.19-44.
- 水本光美 (2013b) 「日本語教科書におけるジェンダー: 教科書の日本女性像は現代社会の実態を伝えているか」『Language and Conceptual World View』No.45, タラス・シェフチャンコ記念キエフ国立大学, pp.153-159.
- KAWASAKI, Kyoko & MCDUGALL, Kirsty. (2003) Implications Representations of Casual Conversation: A Case Study in Gender-Associated Sentence Final Particles. 『日本語教育論集 世界の日本語教育』13, 国際交流基金日本語国際センター, pp.41-55.

[参考資料]

調査対象日本語教科書一覧

		書名	出版年	出版社
日本語教科書	初級	Situational Functional Japanese: Model	1994	凡人社
		Total Japanese: Conversation 2	1994	早稲田大学
		みんなの日本語	1998	スリーエーネットワーク
		げんきⅡ	1999	The Japan Times
		文化初級Ⅱ	2000 改訂	凡人社
	中級	中級の日本語	1994	The Japan Times
		ニューアプローチ 中級日本語 (基礎編)	2002	日本語研究社
		J Bridge	2002	凡人社
		なめらか日本語	2005 改訂	アルク
		まんがで学ぶ日本語会話術	2006	アルク
		会話の日本語	2007 改訂	The Japan Times
中上級	ニューアプローチ 中上級日本語 (完成編)	2002	日本語研究社	
聴解副教材	初級	毎日の聞き取り50日 (下)	1998	凡人社
		楽しく聞こう	2000 改訂	文化外国語専門学校
		聴解が弱いあなたへ	2000	凡人社
		Total Japanese Conversation2 問題集	2000	早稲田大学
		みんなの日本語Ⅱ 聴解タスク25	2005	スリーエーネットワーク
	中級	テーマ別日本語 (ワークブック聴解)	2004 改訂	研究社
		日本語生中継 (中上級)	2004	くろしお出版
	日本語生中継 (初中級1)	2006	くろしお出版	
試験	能試	平成15年度～19年度: 日本語能力試験問題と正解 (1級2級)	2004-2008	凡人社
	留試	日本留学試験 試験問題: 16年度～19年度 (第1回, 第2回) 20年度 (第1回)	2004-2008	桐原書店

(みずもと てるみ・北九州市立大学教授)